

第一回目の帰還者二十人の中に入り、各収容所を転々としてナホトカ着。昭和二十二年七月二日、ナホトカ港出港（第三十回引揚船）にて特に問題もなく懐かしい舞鶴港上陸、七月十日復員。

帰国後の生活

昭和二十三年三月、満州での炭鉱勤務の経験により平の配炭公団に勤め、二十六年九月から三十三年三月まで中学校、小学校の教員、三十三年四月から四十五年一月まで病院事務、その後インテリア会社に入社、昭和六十三年三月まで勤務する。

今振り返ってみると、シベリア抑留生活も苦勞が多かったが、徐州作戦に参加したときの方が辛かったように考えられる。また、大陸に夢を託した青春時代から一転して故郷に帰った身として、長男でありながら弟が親の跡継ぎになり、職場も幾度かわったが、特に不利な点はなく年金生活に甘んじている。

シベリア抑留

苦節四年間の思い出

神奈川県 境 田 伊 俊

昭和二十年八月十五日昼過ぎ、すぐく速い戦闘機が三機飛行するのを見た。「ああ、日本にもあんなすばらしい飛行機があつたのか」と思っていたら、何と敵ソ連の飛行機だとの報告を聞き、びっくりした。それから一時間後、無線連絡にて、日本はボツダム宣言を受諾して連合国側に無条件降伏したとのことを知らされた。その時の戦友たちの表情といたら、ただただ茫然としてだれ一人口をきく者なく、ただ余りの悔やしさに襟章をちぎって投げ捨て男泣きする戦友もいた。二日後、連隊本部に集合との命令により全隊員本部に集合。終戦について連隊長より種々訓示を受けた。それには、我々の意に反し、やむを得ずソ連軍から武装解除を受けることになる、諸氏はその指示に素直に

従ってもらいたい、決して輕拳盲動に走らないようにと切々と訴えられた。長年、砲兵大佐として軍務に励んで来た連隊長の胸中は、いかばかりであつたことかと思ひます。

幕舎に戻つた連隊長は、従容として拳銃により自決された。いつも大言壯語を吐く上層部の連中よりはるかに軍人らしい連隊長だつたとしみじみ思ひ、御冥福を祈つた。

ソ連軍の進駐と共に自発的に武装解除を受けた。初めて接したソ連軍の武装といつたら、我が軍の比ではない。よくも貧弱な装備で戦つたものだ。まるで大人と子供のような軍隊だつた。

一週間後、間島省延吉に集合させられた。ここで千人単位の一つ大隊が編制された。そして延吉を後に徒歩で琿春を経由して、初めて未知の地、ソ連領クラスキノという地に着いた。いよいよここから思ひもよらぬ苦難の日々が始まつた。待機していた貨物列車に乗せられた。有蓋の貨車に三十名も身動きもできないほど押し込められたので、足を伸ばすこともできない。

寝るときも交互に戦友の腹の上に足を乗せて寝た。まるで牛馬同様の扱いだつた。列車はシベリア鉄道を北へ北へと走つた。ウラジオストクから東京ダモイとソ連兵に聞かされていたので、初めはすっかりそれを信じウラジオストクに向かうものと思つて、不安の中にも明るい希望を抱いていた。

しかし、列車はウラジオストクと反対方向に走っているようだ。太陽の方向により進行方向が分かる。列車は北に走つたと思つたらアムール川に沿つて東進、どこに行くのか皆目わからない。ある大きな町に着いた。ハバロフスクだつた。もはや東京ダモイどころではない。我々の願ひは完全に消えてしまつた。なおも列車は走り、コムソモリスクと言う所に着き、下車を命ぜられた。そして今度は舟に乗せられアムール川を渡り、沿海州の野原にある收容所に入つた。ここから飢えと寒さと強制労働による、筆舌に尽くしがたい苦難を味わうことになつた。

冬になれば零下三〇度、四〇度はざらである。左右の指十本凍傷にかかり、苦しい思いをした。零下五〇

度のときも作業に駆り出されたことがあった。零下三五度以上の野外作業はないと聞いていたが、そのような規則は我々には与えられなかった。食糧事情も粗悪なもので、大豆、高粱、粟、馬鈴薯などで、米など四年間の抑留期間中、口にすることもない。ましてや見たこともなかった。量的にも少なく、当然体がだるく力も出ない。このような状態にかかわらず、ノルマ達成のためソ連人からダワイ、ダワイと追いまくられた。石の運搬作業で、頭大のものをトラックの荷台に乗せるにもやつとだった。冬は地面が凍り、掘ることもできない。夏には鉄道線路工事などが多かった。線路わきの側溝工事など、幅一メートル五十センチ、深さ三メートルの溝掘り中、土砂崩れに遭遇、生き埋めになり犠牲になった戦友も大勢いた。その他、栄養失調で倒れた戦友も数知れない。このような戦友たちの名前や住所を覚えていないことが悔やまれる。ただ御冥福を祈るしかない。

このようにして私たちの青春は死を背負った苦難の連続であった。よくもあの悲惨な四年間の抑留生活を

生き抜いて来たものだと思うとぞっとする。また、国際法を無視した旧ソ連の仕打ちは忘れることができない。

終わりに、今なおシベリアの凍土の下に眠る万余の亡き戦友の御冥福を祈り 合掌。

惨めなる敗戦

滋賀県 島田 敏

私は、満州間島省琿春^{こんしゅん}県^{しゅんか}春化^{しゅんか}に駐屯した歩兵連隊に所属する軍医でした。

昭和二十年八月九日、ソ連軍は突如として雪崩のごとく国境を突破して進撃してきました。

私たちは十里坪に転進応戦しました。ソ連軍の多数の戦車を持つ機動隊の戦力には対抗できず、多くの死傷者が出ました。

八月二十五日第三軍司令部からの連絡將校がやって来て、初めて全面降伏したことを知らされ、八月二十